

原著

セルフ・エフィカシー理論からみた大学生の学業意欲の研究 ——A 大学の「六次産業化の担い手プログラム」での事例——

楠奥繁則¹⁾中野謙²⁾¹⁾ 立命館グローバル・イノベーション研究機構²⁾ 東大阪大学こども学部アジアこども学科

要約：近年，大学生活を通じた学修に対して，不安を抱える大学生が増加傾向にある。モチベーション理論の 1 つであるセルフ・エフィカシー理論では，こうした不安が学生の学修意欲の低下を招くことが指摘されている。つまり，学業に対する不安によって，学修意欲が高まらない学生が年々増加している。そこで本研究では，セルフ・エフィカシー理論の観点から，この問題を検討する。先行研究では，学修意欲は「授業意欲」と「学業意欲」とに分けて捉える必要があることが指摘されている。したがって本研究では，これらのうちの「学業意欲」に焦点を当てた検討を行う。研究の流れは，①学業に対するセルフ・エフィカシーを測定するための尺度の開発，②学業に対するセルフ・エフィカシーを高めることで学業意欲が高まるか否かの検証，③セルフ・エフィカシー理論に基づいた問題克服のための教育プログラムの考察である。

(キーワード：セルフ・エフィカシー，学修意欲，学業意欲，大学生)

A Study on Undergraduates' Academic Motivation Based on Self-Efficacy Theory —— A Case of the successor cultivation program for "Sixth Industrialization" ——

Shigenori KUSUOKU¹⁾ and Ken NAKANO²⁾¹⁾ Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University²⁾ Faculty of Child Science, Department of Asian Child Studies, Higashi-Osaka College

Abstract: Nowadays, undergraduates who feel anxiety for their learning in their academic life tend to increase in number. According to self-efficacy theory, which is one of the motivation theories, this kind of nervousness can decrease the undergraduates' learning motivation. In other words, anxiety for learning causes to depress the undergraduates' learning motivation. From this background, the present study tries to evaluate learning motivation based on a self-efficacy theory. Previous studies pointed out that learning motivation should be recognized as two different types, i.e., the motivation in the classroom and that for academic research. Therefore, we focus on academic motivation in the present study.

This paper is composed of 3 steps: (1) to set up criteria to measure academic learning self-efficacy for undergraduates, (2) inspection whether learning motivation changes with a change in self-efficacy, and (3) consideration on the educational program to solve the learning problem based on self-efficacy theory.

(Key words: self-efficacy, learning motivation, academic motivation, undergraduates)

1. 問題と目的

近年，一般社団法人日本私立大学連盟 (2011)¹⁾ の報告によると，大学での学修に対する不安や悩みを抱える大学生が少なくなく (表 1)，また，その数は漸増傾向にある (表 2)。モチベーション理論の 1 つであるセルフ・エフィカシー理論 (Bandura, 1977)²⁾ の重要概念「情動的喚起」(気分の高揚がセルフ・エフィカシーを高め，気分の低下がセルフ・エフィカシーを下げる) に基づくと，学修に対する不安・悩みは，学修におけるセルフ・エフィカシーを直接低下させ，学修意欲を低下させることになる。セルフ・エフィカシー (self-efficacy) とは，不馴れな行動に対する自信

の程度を表す。ある行動に対するセルフ・エフィカシーの向上は，直接その行動のモチベーションの向上につながるとされる。この理論に従うと，大学での学修意欲が高まらない学生が年々増加しているということになる。ほとんどの大学生は，卒業後，大学で身につけた専門知識を活かして自ら考え行動する知識労働者となる。大学生が知識基盤社会で充実したキャリア^{注1)}を歩むためには，大学で積極的に専門知識を身につけること，つまり，大学での学修がとても重要になる。このように，学生に対するキャリア支援という視点から考えても，学修意欲の向上について取り組むことは非常に重要である。

表 1 学生の不安・悩みの内容

	(%)
就職や将来の進路	51.5
授業などの学業	21.3
友人等との対人関係	17.7
経済問題(家計・学費・ローン等)	16.5
異性問題	12.3

回答は2つまで

表 2 漸増する学業に対する不安や悩み

	(%)
2003年	9.3
2007年	18.0
2011年	21.3

大学での学修は、セルフ・エフィカシーの研究対象に成りうるのだろうか。荻谷 (2012)⁴⁾ が述べるように、大学は「学問するところ」で、大学教育は高校までの教育とは異なる (上田・恒吉, 2013)⁵⁾。具体的に述べると、大学での学修では、学問が積み上げてきた既存の知識を正しく身につけ、それらを用いてより正しい答えに到達するための技を身につけるところまで達成できなければならない。京都大学の学生を対象にした神藤・伊藤 (2000)⁶⁾ の研究によると、多くの学生が、高校時代に比べて、勉強のやり方が分からなくなったと感じている。大学での学修は、多くの学生にとっては、まったくやったことのない行動、あるいは、ほとんどやったことのない行動と位置づけることができる。したがって、大学での学修という行動は、セルフ・エフィカシーの研究対象と成りうる。

溝上 (2004)⁷⁾ や半澤 (2007)⁸⁾ の研究を踏まえると、学修意欲は少なくとも、「授業意欲」(授業・講義での取り組みに対するモチベーション) と「学業意欲」(授業・講義以外での取り組みに対するモチベーション) に分けて考える必要があろう。前者の研究では、学生の「授業意欲」は1回生後期、2回生と段階を経て低下することが、また、大学生の「学業意欲」は入学期からあまり高くないことが報告されている。そこで本研究では、「学業意欲」に焦点を当て、学生の学修に対する

不安や悩みを解決するための方法について議論する。なぜなら、知識労働者として充実したキャリアを歩むには、学生は卒業後、自ら進んで積極的に学び続ける姿勢が要求されるからである。

セルフ・エフィカシーの視点から大学の学修についての議論としては、足立 (2011)⁹⁾ や山本・岩本・原口 (2012)¹⁰⁾ の研究がある。前者は大学生の学修に焦点を当てた研究で、セルフ・エフィカシーを測定する尺度を作成している。しかし、その尺度で測定されているのは、大学の授業・講義での取り組みに対するセルフ・エフィカシーである。授業・講義以外での取り組みに対するセルフ・エフィカシーについてはない。また、その妥当性についても十分議論されていない。後者の研究では、「卒業論文作成」に対するセルフ・エフィカシーが議論されており、本稿で議論したい大学生の授業・講義以外での学修に対するセルフ・エフィカシーではない。

以上を踏まえ、次の3点を本研究の目的とする。まず、大学生の授業・講義以外での学修に対する自信、すなわち、「大学での学業に対するセルフ・エフィカシー」を測定する尺度を作成する。妥当性は、意欲低下尺度 (下山, 1995)¹¹⁾ の下位尺度「学業意欲低下」と、一般性セルフ・エフィカシー尺度 (坂野・東條, 1986)¹²⁾ との相関分析の結果に基づいて議論する。セルフ・エフィカシー理論に基づく、学業意欲低下とは負の相関が、また、一般性セルフ・エフィカシーとは正の相関が予測される。

次に、学生の大学での学業に対するセルフ・エフィカシーを高めることによって、彼・彼女らの学業意欲を高めることができるかを検討する。Bandura (1997) によると、セルフ・エフィカシーは次の4つの情報源、①遂行行動の達成 (やればできるだろうと思うことのできる、直接の成功体験がセルフ・エフィカシーを高める)、②言語的説得 (他者の言葉による説得などがセルフ・エフィカシーを高める)、③情動的喚起 (気分の高揚がセルフ・エフィカシーを高める)、④代理的経験 (他者の行動を観察し、自分でもできそうだと感じることであればセルフ・エフィカシーが高まる)、

を用いて高めることができる。したがって、理論上、4 つの情報源に基づいた教育プログラムを通じて、大学生のセルフ・エフィカシーを高め、学業意欲を高めることができると考えられる。

最後に、学修意欲の高まらない学生が増大している問題を克服するにはどのような教育プログラムを考えればよいのかを、セルフ・エフィカシー理論の視点から議論する。

2. 方法

(1) 研究 1—大学生の大学での学業に対するセルフ・エフィカシー質問項目の作成—

大学生の大学での学業に対するセルフ・エフィカシー尺度を作成するために、まず、2013 年度前期に A 大学で開講された講義「児童・発達心理学」(2~4 回生の 41 名；性別・学年・年齢は尋ねていない)と「動機づけの心理学」(3~4 回生の 12 名；性別・学年・年齢は尋ねていない)で、1 人の学生に 10 枚のカードを配布した。次に、「大学での勉強で楽しいと思うこと」、「大学での勉強で不安を感じる事」について、学生に具体的事実や見解をできる限り多く出すよう指示し、各々の事実ごとに 1 枚のカードにその内容を端的に表記してもらった。回収した 244 枚のカードを全部並べ、同類のカードをグループ化した。尺度の項目作成に必要なキーワードを抽出するために、グループ化したまとまりを線で囲み、そのグループに名前をつけた(表 3)。10 枚以上のカードから成るグループを基準にしたところ、「興味」「先生」「内容理解」「実践」「試験対応・単位取得」「授業適応」「授業価値」のキーワードが抽出された。

大島(2012)¹³⁾も述べるように、大学での学業の集大成とも言えるのが卒業研究、および卒業論文である。それらを完成させるために、彼・彼女らは在学中に自身の研究能力を高めなければならない。大学は研究機関であることも考慮し、「研究」というキーワードも上述のキーワードに加え、尺度の項目を作成した(表 4)。なお、尺度の項目は、浦上(1995)¹⁴⁾の進路選択セルフ・エフィカシー尺度を基に作成している。

(2) 研究 2—大学生の大学での学業に対するセルフ・エフィカシー尺度の作成—

「大学での学業に対するセルフ・エフィカシー尺度」(表 4)の妥当性を確認するために、2013 年度後期に A 大学で開講された講義「教育心理学」と「教育相談の研究」を受講する学生を対象にした質問紙調査を行った。参加者は 127 名(男性 100 名、女性 27 名；平均年齢 19.3 歳)であった。

採点方法は、浦上(1995)の尺度同様、「全く自信がない場合」1 点~「非常に自信がある場合」4 点までの 4 件法で求めた。

その他に測定した変数は次の 3 つである。

1) 大学生の学業意欲(学業意欲低下・授業意欲低下・大学意欲低下)

大学生の学業意欲の測定には、下山(1995)の大学生の意欲低下領域尺度の下位尺度「学業意欲低下」を用いた。大学生の学業意欲に関して議論する際、この尺度はしばしば使用される(半澤, 2009；溝上, 2004；上田・恒吉, 2013 など)¹⁵⁾。この尺度は学業意欲低下を測定するものなので、得点が高いほど、学業意欲が低いことになる。「教師に言われなくても自分から進んで勉強する」、「勉強で疑問に思ったことはすぐに調べる」、「必要な単位以外でも、関心のある授業はとるようにしている」、「大学で勉強をすることで自分の関心を深めている」の 4 項目は、「あてはまる」1 点~「あてはまらない」5 点で求め、「勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう」は、「あてはまらない」1 点~「あてはまる」5 点で求め、5 項目の合計得点を学業意欲低下得点とした。

この意欲低下領域尺度は、学業意欲低下、授業意欲低下、大学意欲低下の 3 つの下位尺度から成る(溝上, 2004；下山, 1995)。そこで、授業意欲低下と大学意欲低下についても測定した。

授業意欲低下は、「授業に出る気がしない」、「朝寝坊などで授業に遅れることが多い」、「何となく授業をさぼることがある」、「大学からの連絡事項を見落とししてしまうことが多い」、「授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある」

表 3 「学業に対するセルフ・エフィカシー」尺度作成のためのキーワード

教示文：「大学での勉強で楽しいと思うことについてお教え下さい」	
■興味 (24 枚)	興味のある授業, 興味をもてたとき, 自分の興味のある授業だったとき, 他
■内容理解 (19 枚)	分からないことが分かった時, 理解できたとき, 内容が理解できたとき, 他
■先生 (17 枚)	先生が楽しそうに授業をしている時, 先生がおもしろいとき, 教授の話がおもしろいとき, 他
■実践 (12 枚)	(学んだこと) 自分の生活と結びついた時, 自分で具体例と結びつけられた時, 日常の出来事と関連づけて考えられた時, 他
教示文：「大学での勉強で不安を感じるについてお教え下さい」	
■試験対応・単位取得 (39 枚)	必要単位を 4 年で取りきれれるかどうか, 論述試験で単位をとれるか, レポート試験で単位をとれるか不安, 他
■授業適応 (39 枚)	勉強についていけるか, 講義についていけないとき, 何を勉強すればよいのか分からない時, 他
■授業価値感 (19 枚)	大学での授業が役に立っているのかと思う時, この授業をやって意味があるのかなと思うとき不安になる, 大学の講義が将来の役に立つのかと思った時, 他
注) 10 枚を超えたもののみを紹介している。	

表 4 大学での学業に対するセルフ・エフィカシー尺度

- 1 自分の興味のある学問や研究テーマについて, 分からないことがあった場合, 先生を利用すること。
- 2 定期試験の論述試験にうまく対処すること。
- 3 レポート試験にうまく対処すること。
- 4 大学の講義で学んだ理論・知識と, 自分自身の経験(例えば, サークルやアルバイトなどでの経験)や, 身の周りの出来事, あるいは, 社会問題などに関連させて考えること。
- 5 CiNiiなどの学術情報データベースを使って, 自分の研究に必要な文献(論文や本)を見つけること。
- 6 自分の興味のある学問分野の文献(本や論文)を読み込むこと。
- 7 先生に研究計画について相談すること。
- 8 自分の興味のある学問を見つけること。
- 9 研究テーマに必要な情報を得るために, 先生を利用すること。
- 10 興味のない授業でも, 興味をもてるように工夫すること。
- 11 卒業論文, あるいは, 卒業研究で, どのようなテーマについて取り組みたいのか, はっきりさせること。
- 12 4年間, あるいは, 自分の目標年限で大学を卒業すること。
- 13 研究テーマを見つけるのに必要な情報を得るために, 専門書・論文などの文献を利用すること。

の 5 項目から成り, 「あてはまらない」1 点～「あてはまる」5 点で求め, 5 項目の合計得点を授業意欲低下得点とした。

大学意欲低下については, 「大学ではいろいろな人と交流がある」, 「大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である」の 2 項目は, 「あてはまる」1 点～「あてはまらない」5 点で求め, 「学生生活で打ち込むものがない」, 「大学にいるより,

自分ひとりでいるほうがいい」, 「大学のなかで自分の居場所がないと感じる」の 3 項目は, 「あてはまらない」1 点～「あてはまる」5 点で求め, 5 項目の合計得点を大学意欲低下得点とした。

2) 一般性セルフ・エフィカシー

特定の状況や行動についてのセルフ・エフィカシーではなく, 個人が一般的にセルフ・エフィカ

シーをどの程度と認知する傾向があるかという一般性セルフ・エフィカシーを、坂野・東條 (1986) の GSES (Generality Self-Efficacy Scale) を用いて測定した。この尺度は 16 項目から成る。回答者は「Yes」「No」の 2 件法で答え、「友人よりすぐれた能力がある」、「世の中に貢献できる力があると思う」などの肯定的な項目については「Yes」1 点、「No」0 点とし、「人と比べて心配性なほうである」、「積極的に活動するのは、苦手なほうである」などの否定的な項目 (逆転項目) に関しては「Yes」0 点、「No」1 点とし、その総計を一般性セルフ・エフィカシー得点とした。得点が高いほど、一般性セルフ・エフィカシーが高い。

3) 進路選択セルフ・エフィカシー

浦上 (1995) の進路選択セルフ・エフィカシー尺度を参考に、「大学での学業に対するセルフ・エフィカシー尺度」を作成したので、それと進路選択セルフ・エフィカシーの相関も確認することにした。進路選択セルフ・エフィカシーとは、キャリア選択に関する意思決定の効力を表す概念で、Taylor & Betz (1983)¹⁶⁾ によって提出された。この尺度は大学生や短大生を対象に作成されたもので、彼・彼女らの進路選択場面で必要とされる広範囲で多様な行動に対するセルフ・エフィカシーを測定するものである。例えば「自分の理想の仕事を思い浮かべること」、「自分の将来設計にあった職業を探すこと」など 30 項目から成る。採点方法は「全く自信がない場合」1 点～「非常に自信がある場合」4 点までの 4 件法で求め、30 項目の合計得点を進路選択セルフ・エフィカシー得点とした。

(3) 研究 3—事例研究—

1) A 大学での事例—「六次産業化の担い手プログラム」の実施—

4 つの情報源に基づいた教育プログラムで、学生の大学での学業に対するセルフ・エフィカシーを高めれば、学業意欲を高められるのか。このことを検討するために、中野謙氏によって 2013 年度に A 大学で実施された「六次産業化の担い手プログラム」に参加した学生の学業に対するセルフ・

エフィカシーを向上させた。そのセルフ・エフィカシーと、「学業意欲低下」の測定には、先ほど紹介した下山 (1995) のスケールを用い、第 1 回目 (10 月 11 日) の最初と、第 13 回目 (1 月 17 日) の終わりに実施したパネル調査をもとに行った。上記プログラムの参加者 10 名のうち 9 名 (経済学部 2 回生 6 名, 3 回生 2 名, 経営学部 1 回生 1 名; 男性 5 名, 女性 4 名; 平均年齢 19.8 歳) が本調査に参加してくれた。

このプログラムでは、参加者の研究能力を向上させることを主目標 (大きな目標) とした。また、その目標を達成するために、「ゼミナール大会^{注 2)}での入賞」と、「ビジネス実践の成功」(図 1) というミッション (小さな目標) を設定した。このプログラムは「①説明する (講義) →②教員が手本を見せる (講義) →③学生に実際にやってもらう (演習) →④評価して再挑戦させる (演習)」という、講義・演習形式となっている (単位認定のない非正規開講科目である)。②は「代理的経験」(教員が手本を見せることで、学生に「これなら自分にもできそうだ」と思ってもらう) を、③は「遂行行動の達成」(「自分はやればできる」という体験を実際に学生に獲得してもらうためのもの) を、そして、④は「言語的説得」と「情動的喚起」(学生の能力を積極的に褒めたり、励ましたりして、彼・彼女らの気分を高揚させ、セルフ・エフィカシーを高める。また、時には学生の活動に対する不安を除去し、彼・彼女らの気分を高揚させて、セルフ・エフィカシーを高める) に基づいている。このプログラムの詳細は次のとおりである。

2) 「六次産業化の担い手プログラム」の内容

「六次産業化」では、一次産業である農業の活性化を目的に、二次産業である食品加工業と三次産業である流通業を組み合わせ、国内農業の振興を目指す取り組みを意図する^{注 3)}。これは、農業が食品加工業や流通業によって垂直的に統合される従来のフードシステムとは異なり、農業が商品の生産・販売における主体となることで、二次産業、三次産業に吸収されていた付加価値を手にすることを目的としている。

しかし、農業が六次産業化によって他産業の機能を獲得するのであれば、他産業が抱えていたリスクやコストも統合することになり、これは社会的分業の合理性と矛盾する（日高，2011：20-21）¹⁷⁾。そこで考えられるのが、農業を活性化させるために、「農家の代わりに六次産業化を担う人材（担い手）を育成するしくみ」である。担い手となる人材は、マーケティング、食品加工、販売業務の経験を積み、なおかつ、自らも農業生産者として農家と連携し、地域資源を活用した商品開発を通して、ニッチ市場（まだ潜在的な需要が開拓されていない「隙間」の市場）の開拓者となることが求められる。これにより、六次産業化のリスクとコストの分散が可能となり、農家は農業に専念することで担い手への出荷を拡大し、閑散期には担い手と協業することで農外収入の機会を得ることが可能となる。こうした構想を実現するために、担い手の育成プログラムを考案し、その効果を検証した。

このプログラムは、「座学」と「ビジネス実践」で構成される。「座学」は、講師（実験者）による講義と、学生（被験者）による演習で成り立ち、前述したように、「①説明する（講義）→②教員が手本を見せる（講義）→③学生に実際にやってみよう（演習）→④評価して再挑戦させる（演習）」という手順により、学生にアウトプットさせることを重視する。これにより、知識として「知っている」に留まらず、自らの技術として「実践できる」ようになることを目指す。ただし、本プログラムは仮説検証のための実験であるため、被験者は謝金や単位認定を受けることができない。そのため、座学においては被験者の利益を最優先し、就職活動に向けたキャリア教育を設定した。一方、実験の目的は「利益追求の実践から得られる教育効果の検証」であるため、活動に真剣に取り組んでもらうために、ビジネス実践で利益が生じた場合は、そのすべてを被験者に還元することとした。座学の内容は表 5 のとおり、論文の書き方、プレゼンテーションの方法、エントリーシートの書き方を中心に設定した。プレゼンテーションの方法については、やり方の見本を見せるだけでなく、講義から得たことを織り込んだプレゼンテーショ

ンをさせ、それにコメントを返す。論文指導は、まず小論文の書き方を説明し、書き方の見本を見せ、実際に書かせる。それを添削して返し、被験者に再考させ、完成稿にして再提出させる。その後、論文の書き方、先行研究分析の方法、現地調査の方法を説明し、それぞれの見本を見せた上で実践させる。これらについても添削して返却し、再考させた上で、再提出させる。エントリーシートの書き方についても同様に、説明し、やって見せ、やらせてみた上で評価し、結果を返して再考させ、再提出させる。こうして、被験者によるアウトプットを重視することで、ビジネス実践においても積極的に発言や提案ができるようになることを目指す。

一方、ビジネス実践においては、教員（実験者）が規格外の農産物を提供してくれる農家を見つけ、その情報を学生（被験者）に伝える（図 1）。学生は、商品企画（食品加工案）を立てて農家と交渉し、規格外農産物を譲り受ける。その際に不可欠な、仕入れ価格、販売価格、取引形態（買い取り販売か委託販売か）などの交渉も、すべて自ら行う。こうして、事業を立ち上げるための諸条件を整えた上で、商品の生産と販売を実践する。教員は、こうした企画立案や交渉に必要な学生のスキルを磨くために、座学とビジネス実践の双方を通じて、学生を指導・訓練する。さらに、事業を運営する上で必要となる知識や経営分析の手法を講義し、学生が自ら経営の評価を行えるように指導する^{注 4)}。学生はこの一連の活動を期末に報告書としてまとめ、教員はそれを論文に仕上げる指導をする。

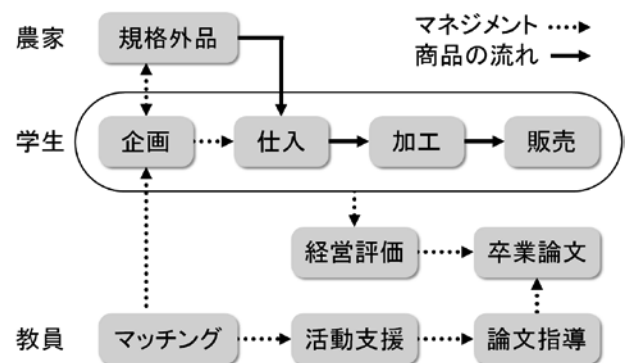


図 1 「ビジネス実践」の流れ

表 5 座学のスケジュールと内容

回数	日にち	内容
第1回	10月11日 (金)	ガイダンス:実験の主旨説明と役割分担
第2回	10月18日 (金)	研究報告会の準備
第3回	10月27日 (日)	講義:「小論文の書き方」
第4回	10月29日 (火)	演習:小論文の報告と添削
第5回	11月1日 (金)	講義:「論文の書き方」
第6回	11月8日 (金)	講義:「プレゼンテーションの作法」
第7回	11月15日 (金)	活動の打合せ:株式会社アクス訪問
第8回	11月22日 (金)	演習プレゼンテーションの実践
第9回	11月29日 (金)	講義:「エントリーシート作成の心得」
第10回	12月13日 (金)	来年度方針の報告 演習:ゼミナール大会プレゼンテーション練習
第11回	12月20日 (金)	ゲストスピーカー「企業に求められる人材」とは
第12回	1月10日 (金)	演習:「エントリーシートの報告と評価」
第13回	1月17日 (金)	半期の活動の振り返り

3. 結果

(1) 項目候補の決定

1) I-T 相関分析

「大学での学業に対するセルフ・エフィカシー尺度」の 13 項目の全体得点 (Total) と各単一項目 (Item) との相関係数を求め、 $r = 0.40$ を基準に、項目候補を決定した。全項目、 $r = 0.40$ を上回った ($r = 0.44 \sim 0.70$)。

2) 因子分析

13 項目で因子分析 (主因子解, プロマックス回転) を行った。固有値 1 以上を基準に、また、因子負荷量 0.40 を基準に項目を選択した。その基準に達しなかった項目 12 「4 年間、あるいは、自分の目標年限で大学を卒業すること」を除外して、再度因子分析を実施した結果、3 因子が抽出された (表 6)。

各因子は、Factor 1 「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」、Factor 2 「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」、Factor 3 「試験対処に対するセルフ・エフィカシー」と解釈された。

(2) 尺度の検討

1) 各変数の平均値・標準偏差・ α 係数

まず、「大学での学業に対するセルフ・エフィカシー尺度」の、「全く自信がない場合」1 点～「非常に自信がある場合」4 点とし、(項目 12 を除いた) 12 項目の合計得点を大学での学業に対するセ

ルフ・エフィカシー得点とした。また、Factor 1, 2, 3 に得点を与えた。それらの変数と、測定した学業意欲低下、一般性セルフ・エフィカシー、進路選択セルフ・エフィカシーの平均値、標準偏差、Cronbach の α 係数を算出した (表 7)。

学業意欲低下、授業意欲低下、大学意欲低下の α 係数が若干低い ($\alpha = 0.60 \sim 0.65$)、それらの項目数が各 5 項目であるということを考慮すると、妥当な数値であろう。

2) 尺度の妥当性の検討

尺度の妥当性を検討するために、まず、測定した各変数間の相関係数を算出した (表 8)。

次に、特にどのような学業に対するセルフ・エフィカシーが学業意欲低下に影響を及ぼしているのかを確かめるために、学業計画に対するセルフ・エフィカシー、学業遂行に対するセルフ・エフィカシー、および試験対処に対するセルフ・エフィカシーを独立変数、学業意欲低下を従属変数にした重回帰分析を行った (表 9)。

① モチベーション (意欲) の関連から

まず、モチベーションの視点から検討する。表 8 をみると、「学業に対するセルフ・エフィカシー」(12 項目) と、「学業意欲低下」との間で $r = -0.53$ ($p < 0.001$) と、有意な負の相関がみられた。一方、「授業意欲低下」とは有意な負の相関がみられなかった。

Factor 1～3 に着目すると、「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」、「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」、「試験対処に対するセルフ・エフィカシー」と、「学業意欲低下」との間で $r = -0.47$ ($p < 0.001$), $r = -0.51$ ($p < 0.001$), $r = -0.23$ ($p < 0.001$) と有意な負の相関がみられたが、「授業意欲低下」とは有意な負の相関がみられなかった。

表 9 より, 3 因子構造から成る大学での学業に対するセルフ・エフィカシーの中でも Factor 1 「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」 ($\beta = -0.27$; $p < 0.01$) と Factor 2 「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」 ($\beta = -0.35$; $p < 0.001$) が学業意欲低下に影響を及ぼすと考えられる。

②セルフ・エフィカシーの関連から

次に, セルフ・エフィカシーの視点から検討する。「学業に対するセルフ・エフィカシー」(12 項目) と、「一般性セルフ・エフィカシー」との間で $r = 0.44$ ($p < 0.001$), 「進路選択セルフ・エフィカシー」との間で $r = 0.78$ ($p < 0.001$) と有意な正の相関がみられた。

「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」, 「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」, 「試験対処に対するセルフ・エフィカシー」と、「一般性セルフ・エフィカシー」との間で $r = 0.41$ ($p <$

0.001), $r = 0.26$ ($p < 0.01$), $r = 0.38$ ($p < 0.001$) と有意な正の相関が, また, 「進路選択セルフ・エフィカシー」との間で $r = 0.74$ ($p < 0.001$), $r = 0.60$ ($p < 0.001$), $r = 0.46$ ($p < 0.001$) と有意な正の相関がみられた。

(3) 「六次産業化の担い手プログラム」の効果

「六次産業化の担い手プログラム」の参加前後で学生の「学業に対するセルフ・エフィカシー」と「学業意欲低下」に変化がみられたのだろうか。そのことを確かめるために, Wilcoxon の符号付き順位検定で中央値の差の検定を行った (表 10)。サンプルサイズは 9 と小さく, 中心極限定理が効かないと考えられるので, その検定を行った。

「学業に対するセルフ・エフィカシー」(12 項目), 「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」と「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」の中央値は上昇しており, また, 「学業意欲低下」の中央値は下降しており, かつ, 統計的有意差がみられた。

4. 考察

(1) 尺度, (2) セルフ・エフィカシー理論からみた学業意欲, (3) セルフ・エフィカシー理論からみた大学教育プログラムを考察し, 今後の課題を述べる。

表 6 因子分析 (主因子解, プロマックス回転) の結果 ($n = 127$)

	Factor 1	Factor 2	Factor 3	共通性	固有値
学業計画に対するセルフ・エフィカシー ($\alpha = 0.82$)					
自分の興味のある学問や研究テーマについて, 分からないことがあった場合, 先生を利用すること。	0.79	-0.07	-0.01	0.55	
先生に研究計画について相談すること。	0.77	0.07	-0.14	0.60	
卒業論文, あるいは, 卒業研究で, どのようなテーマについて取り組みたいのか, はっきりさせること。	0.65	-0.18	0.20	0.41	4.66
研究テーマに必要な情報を得るために, 先生を利用すること。	0.60	0.16	-0.07	0.50	
自分の興味のある学問を見つけること。	0.51	-0.06	0.29	0.40	
CiNiiなどの学術情報データベースを使って, 自分の研究に必要な文献 (論文や本) を見つけること。	0.46	0.25	-0.09	0.39	
学業遂行に対するセルフ・エフィカシー ($\alpha = 0.71$)					
興味のない授業でも, 興味をもてるように工夫すること。	-0.07	0.70	0.03	0.44	
自分の興味のある学問分野の文献 (本や論文) を読み込むこと。	-0.06	0.66	0.02	0.39	1.35
大学の講義で学んだ理論・知識と, 自分自身の経験 (例えば, サークルやアルバイトなどでの経験) や, 身の周りの出来事, あるいは, 社会問題などを関連させて考えること。	0.06	0.45	0.12	0.29	
研究テーマを見つけるのに必要な情報を得るために, 専門書・論文などの文献を利用すること。	0.35	0.43	-0.02	0.49	
試験対処に対するセルフ・エフィカシー ($\alpha = 0.70$)					
レポート試験にうまく対処すること。	-0.11	0.06	0.99	0.94	1.13
定期試験の論述試験にうまく対処すること。	0.28	0.05	0.43	0.38	
	因子間相関: Factor 1	0.64	0.35		
	Factor 2		0.25		

表 7 各変数の平均値・標準偏差・ α 係数 ($n = 127$)

	range	平均値	標準偏差	α
学業に対するセルフ・エフィカシー(12項目)	12 ~ 48	31.53	5.57	0.85
学業計画に対するセルフ・エフィカシー	6 ~ 24	15.93	3.32	0.82
学業遂行に対するセルフ・エフィカシー	4 ~ 16	10.39	2.12	0.71
試験対処に対するセルフ・エフィカシー	2 ~ 8	5.21	1.33	0.70
学業意欲低下	5 ~ 25	14.32	2.94	0.64
授業意欲低下	5 ~ 25	13.02	3.90	0.65
大学意欲低下	5 ~ 25	12.78	3.36	0.60
一般性自己効力感	0 ~ 16	7.21	3.66	0.77
進路選択セルフ・エフィカシー	3 ~ 120	81.92	13.78	0.94

表 8 各変数間の相関係数 ($n = 127$)

	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
① 学業に対するセルフ・エフィカシー(12項目)	0.92***	0.80***	0.61***	-0.53***	-0.07	-0.28**	0.44***	0.78***
② 学業計画に対するセルフ・エフィカシー		0.58***	0.42***	-0.47***	-0.02	-0.25**	0.41***	0.74***
③ 学業遂行に対するセルフ・エフィカシー			0.33***	-0.51***	-0.09	-0.23*	0.26**	0.60***
④ 試験対処に対するセルフ・エフィカシー				-0.23**	-0.11	-0.17†	0.38***	0.46***
⑤ 学業意欲低下					0.11	0.16†	-0.09	-0.43***
⑥ 授業意欲低下						0.14	-0.20*	-0.12
⑦ 大学意欲低下							-0.40***	-0.23*
⑧ 一般性セルフ・エフィカシー								0.45***
⑨ 進路選択セルフ・エフィカシー								-

† $p < 0.10$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

表 9 大学の学業に対するセルフ・エフィカシーが学業意欲低下に及ぼす影響 ($n = 127$)

決定係数	独立変数	標準 偏回帰係数	t 値	VIF
$R^2 = 0.30$ (0.29)	学業計画に対するセルフ・エフィカシー	-0.27	2.78**	1.64
	学業遂行に対するセルフ・エフィカシー	-0.35	3.77***	1.52
	試験対処に対するセルフ・エフィカシー	-0.01	0.09	1.23

注1) *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$

注2) ()の数值は修正済み R^2 .

注3) VIF = 1.23~1.64で多重共線性は認められない.

表 10 Wilcoxon の符号付き順位検定 ($n = 9$)

		事前	事後	
学業に対する セルフ・エフィカシー(12項目)	中央値	29.00	38.00	$z = 2.53^*$
	標準偏差	6.76	4.53	
学業計画に対する セルフ・エフィカシー	中央値	16.00	19.00	$z = 2.40^*$
	標準偏差	3.17	1.96	
学業遂行に対する セルフ・エフィカシー	中央値	9.00	12.00	$z = 2.55^*$
	標準偏差	2.62	2.76	
試験対処に対する セルフ・エフィカシー	中央値	6.00	6.00	$z = 1.52$
	標準偏差	1.54	0.73	
学業意欲低下	中央値	18.00	16.00	$z = 2.45^*$
	標準偏差	4.35	3.33	

* $p < 0.05$

(1) 尺度の検討

本研究の第 1 の目的は、学生の大学での学業に対するセルフ・エフィカシーを測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行うことであった。予備調査によって作成された 13 項目の質問に対して、IT 相関分析および因子分析の結果、12 項目から成るセルフ・エフィカシー尺度が作成された。この尺度は、「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」、「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」、「試験対処に対するセルフ・エフィカシー」という 3 つの下位尺度からなることが明らかとなった。

信頼性の検討の結果から、本尺度は十分な内的整合性を有することが明らかとなった ($\alpha = 0.70 \sim 0.82$)。

妥当性の検討については、モチベーション (意欲) に焦点を当てると、「学業に対するセルフ・エフィカシー」(12 項目)、「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」、「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」、「試験対処に対するセルフ・エフィカシー」は「授業意欲低下」との間に有意な相関が得られなかった。そのような結果になったのは、この尺度は、授業・講義以外での取り組みに対するセルフ・エフィカシーに焦点を当てたためと考えられる。

次に、セルフ・エフィカシーに焦点を当てて、妥当性を検討すると、「学業に対するセルフ・エフィカシー」(12 項目)、「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」、「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」、「試験対処に対するセルフ・エフィカシー」と「一般性セルフ・エフィカシー」との間に有意な正の相関がみられた ($r = 0.26 \sim 0.44$)。また、「進路選択セルフ・エフィカシー」との間には高い有意な正の相関がみられた ($r = 0.46 \sim 0.78$)。大学での学業に対するセルフ・エフィカシー尺度は進路選択セルフ・エフィカシー尺度を基に作成したので、高い有意な正の相関がみられたと考えられる。

以上より、これらの結果は妥当なものであると考えられる。

前述したように、大学での学業に対するセル

フ・エフィカシーと、進路選択セルフ・エフィカシーとの間には強い有意な正の相関がみられた。セルフ・エフィカシー理論では、例えば「大学に行く」という行動へのセルフ・エフィカシーが高まると、それが「アルバイトをする」「ボランティアをする」などという他の領域の行動のセルフ・エフィカシーにも影響を与えると考える (般化)。そのことから、学業に対するセルフ・エフィカシーを高めることによって、進路選択セルフ・エフィカシーを高めることができると考えられる。今日、大学生の職業未決定が問題視されている。この問題を解決する一方法に、彼・彼女らの進路選択セルフ・エフィカシーを高めるという方法がある。しかし、進路選択セルフ・エフィカシーを高める方法に関する研究は非常に乏しいことが課題となっている (楠奥, 2013)¹⁸⁾。したがって、大学での学業に対するセルフ・エフィカシーを高め、進路選択セルフ・エフィカシーを高める研究を行うことは今後の課題として意義があろう。

(2) セルフ・エフィカシー理論からみた学業意欲の検討

学生の大学での学業に対するセルフ・エフィカシーを高めることによって、彼・彼女らの学業意欲を高めることができるのかを検討する。

4 つの情報源を意識した「六次産業化の担い手プログラム」の参加前後で、「学業に対するセルフ・エフィカシー」(12 項目)、および、「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」と「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」で統計的有意な上昇がみられ、「学業意欲低下」では統計的有意な下降がみられた (表 10)。そのような結果がみられた要因については、次のように考える。

ビジネス実践 (図 1) では、利益は生じず、赤字であった。したがって、その実践を通じて学生は「遂行行動の達成」を獲得したとは考えられない。だが、今回利益が得られなかったのも、次年度も頑張りたいと思い、2014 度のそのプログラムにも参加したと答えた学生が 2 人いた。その悔しい気持ちが、2 人の気分を高揚させた可能性は考えられる (情動的喚起)。

その他に、プログラムの講師がプレゼンテーションの仕方、そして、論文の書き方の手本を学生に観察させたこともよかったと考えられる。その結果、「このようにすれば、私にもできそうだ」と思えた学生もいたであろう(代理的経験)。内気でプレゼンテーションの苦手な学生(1名)は、真剣に手本を参考に学修し、時には、直接相談に来たこともあった。その結果、同学生が所属するチーム(2人)が参加したベンチャービジネス・コンテストでは、受賞は逃したものの、予選を通過し、本戦まで進むことができた。このような直接の成功体験がプレゼンテーションに対するセルフ・エフィカシーを高め(遂行行動の達成)、他の領域である大学での学業に対するセルフ・エフィカシーも高めたことも考えられる(般化)。

A 大学では、毎年、アカデミックな内容が要求されるゼミナール大会が開催される。本プログラムに参加した2チーム(7人)は同大会に参加し、本プログラムの実践をテーマにした論文で、どちらも入賞することができた。この「遂行行動の達成」も、彼・彼女らのセルフ・エフィカシー向上に最も影響を及ぼしたものだと考えられる。

その他に、講師が学生の優れた部分(例えば、学生のリーダーシップなど)を徹底的に褒めることを常に忘れず、心掛けたことも考えられる(言語的説得)。

なお、このプログラムで「試験対処に対するセルフ・エフィカシー」に統計的有意差が見られなかったのは、本プログラムでは試験対処に関する知識などの教授は行わなかったためだと考える。

以上より、研究能力向上に焦点を当てた教育プログラムによって、学生の学業に対するセルフ・エフィカシーを高めることは可能であることが示唆された。

しかし、以上に述べた事例研究は十分な実証ではないので、この教育プログラムが、必ずしも大学生の大学での学業に対するセルフ・エフィカシーを高め、その結果、学業意欲を高めたとは言えない。だが、セルフ・エフィカシー理論に従うと、大学での学業に対するセルフ・エフィカシーが高まれば、学業意欲は高まることや、学業に対する

セルフ・エフィカシーと学業意欲低下の間では相関が高いという結果も踏まえると(表8)、4つの情報源を意識した教育プログラムを通じて、大学生の学業意欲を高めることができるものと考えられる。特に、表9より、決定係数は0.30程度だが、「学業計画に対するセルフ・エフィカシー」と「学業遂行に対するセルフ・エフィカシー」の向上に焦点を当てた教育プログラムを実施すれば、効率よく学業意欲を高めることができると考えられる。

(3) セルフ・エフィカシー理論からみた大学教育プログラムの検討

「六次産業化の担い手プログラム」の実践を通じてこの種のプログラムを企画する際、どのようなことを留意する必要があるのか、セルフ・エフィカシー理論から考察したい。

このプログラムでは「規格外農産物の商品化」という具体的な課題を講師が参加者に与え、参加者である学生が講師と共にその解決を目指すという、PBL(課題解決学修; project based learning)を用いた。では、学生に与える課題内容は、彼・彼女らにとって面白いかどうかは重要なことであろうか。たしかに、その面白さは、学生をプログラムに惹きつけるためには重要であろう。しかし、セルフ・エフィカシー理論に基づくと、それが学生にとって面白くないものであっても、適切な学修経験を通じて、やがて学生にとっては大きな意味をもつようになる(Bandura & Schunk, 1981; Bandura, 1986)^{19) 20)}。すなわち、面白くない課題であっても、学生が適切な学修体験ができ、目標を一つ一つ達成していくことができ(遂行行動の達成)、かつ、彼・彼女らが自身の努力の成果を判断することができるようなプログラムであれば、学生はその判断によって、学業に対するセルフ・エフィカシーを高めることができる。結果、面白くない課題に対しても、内発的モチベーションが高まる。つまり、課題の面白さよりも、次の3つを教員が学生に提供することが、学生の大学での学業に対するセルフ・エフィカシーを高めるのに重要であると考えられよう。①最終目標(大きい

目標) の設定と、その目標達成のために必要なミッション (小さい目標) の設定, ②適切な学修体験ができる機会の提供, ③学生が努力の成果を判断できる機会の提供, である。

「六次産業化の担い手プログラム」では最終目標を参加者の「研究能力の向上」と設定した。そして、その達成のためのミッションを「ゼミナール大会での入賞」と「ビジネス実践の成功」とした。講師は、そのミッションを達成するために必要な適切な学修体験を学生に与えた (例えば、論文の書き方指導, 現地調査の方法指導など)。ビジネス実践では成功しなかったものの、ゼミナール大会での入賞によって、7 名の学生は努力の成果を判断することができ (遂行行動の達成), 大学での学業に対するセルフ・エフィカシーが向上した。前節で、このプログラムの参加者のセルフ・エフィカシーが高まった要因を複数考察したが、その考察を踏まえると、遂行行動の達成がセルフ・エフィカシーを向上させた最も大きな要因だったのかもしれない。十分な実証ではないが、この事例から、①～③を考慮した大学教育プログラムが、セルフ・エフィカシーを高めるのに有効であることが示唆された。

注

- 1) ここでいうキャリアとは、「成人になってフルタイムで働き始めて以降、生活ないし人生全体を基盤にして繰り広げられる長期的な (通常は何十年にも及ぶ) 仕事生活における具体的な職務・職種・職能での諸経験の連続と、(大きな) 節目での選択が生み出していく回顧的意味づけ (とりわけ、一見すると連続性が低い経験と経験の間の意味づけや統合) と、将来構想・展望のパターン」(金井, 2002: 141)³⁾ のことである。
- 2) A 大学では毎年 12 月にゼミナール大会が開催される。ゼミナール大会では、アカデミックな内容の報告などが要求される。
- 3) 「六次産業」は、一次産業, 二次産業, 三次産業の数字を掛け合わせると「6」になることから命名された。

- 4) ただし、今回の実験では、当初予定していた経営分析の指導をキャリア教育に変更したため、これらは次年度の通年実験に持ち越した。

引用文献

- 1) 一般社団法人日本私立大学連盟『私立大学学生生活白書 2011』, 2011 年.
一般社団法人日本私立大学連盟ホームページ < <http://www.shidairen.or.jp/publications> > (2014 年 12 月 30 日) .
- 2) Bandura, A. “Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change”, *Psychological Review*, 84, 191-215, 1977.
- 3) 金井壽宏『働くひとのためのキャリア・デザイン』, PHP 研究所, 2002 年.
- 4) 荻谷剛彦『グローバル化時代の大学論②—イギリスの大学・ニッポンの大学—』, 中公新書ラクレ, 2012 年.
- 5) 上田佳苗・恒吉徹三: 大学生の学業意欲の変化について, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第 36 号, 115-123, 2013 年.
- 6) 神藤貴昭・伊藤崇達: 高等学校と大学の接続に関する研究 (その 2) —大学の学業文化への参入と学修方略の変容—, 京都大学高等教育研究, 第 6 号, 35-52, 2000 年.
- 7) 溝上慎一: 大学新入生の学業生活への参入過程—学業意欲と授業意欲—, 京都大学高等教育研究, 第 10 号, 67-87, 2004 年.
- 8) 半澤礼之: 大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の作成, キャリア教育研究, 第 25 号, 15-24, 2007 年.
- 9) 足立真乙: 大学生の学修における計画性・持続性に及ぼす意識の効果, 電子情報通信学会技術研究報告.ET, 教育工学, 第 111 巻第 237 号, 43-48, 2011 年.
- 10) 山本登・岩本澄子・原口雅浩: 卒業論文作成に対する自己効力感と重要性認知が一般性自己効力感に与える影響, 久留米大学心理学研究, 第 11 号, 91-101, 2012 年.
- 11) 下山晴彦: 男子大学生の無気力の研究, 教育

- 心理学研究, 第 43 巻第 2 号, 145-155, 1995 年.
- 12) 坂野雄二・東條光彦: 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, 行動療法研究, 第 12 巻第 1 号, 73-82, 1986 年.
 - 13) 大島堅一: 卒業論文の書き方, 2012 年.
立命館大学国際関係学部ホームページ<
http://www.ritsumei.ac.jp/ir/ir-navi/common/pdf/technic/technic_text_09.pdf> (2014 年 12 月 30 日) .
 - 14) 浦上昌則: 学生の進路選択に対する自己効力感に関する研究, 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学), 第 42 巻, 115-126, 1995 年.
 - 15) 半澤礼之: 大学生の学業に対するリアリティショックと学業・授業意欲低下の関連—Locus of control の高低に応じた関連の違いの検討—, 共愛学園前橋国際大学論集, 第 9 号, 27-37, 2009 年.
 - 16) Taylor, K. M. & Betz, N. E. “Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision”. *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81, 1983.
 - 17) 日高健: 農漁村の 6 次産業化を支えるビジネスシステムと展開メカニズム, 近畿大学理工学部経営ビジネス学科『経営ビジネス学科研究論文集』, 第 2 号, 2011 年.
 - 18) 楠奥繁則: キャリア・カウンセリングが大学生の進路選択セルフ・エフィカシーに及ぼす効果, 博士学位請求論文, 立命館大学経営学研究科, 2013 年.
 - 19) Bandura, A. & Schunk, D. H. “Cultivating competence, self-efficacy, and intrinsic interest through proximal self-motivation”, *Journal Personality and Social Psychology*, 41, 586-591, 1981.
 - 20) Bandura, A. *Social foundations of thought and action*, Prentice Hall, 1986.